

#### (4) 角楼

背面側から正面側へとかわる位置にあたり、西門へは60mのところを所在する。最高所の鬼城山から南西に派生する尾根の鞍部上方で、左右から谷部が入り込んでいる。位置的にみて、背面側からの進入の要地の一つにあたるどころと考えられる。

- ・ここでは屈折する城壁の外側に、正面側約13m奥行側約4mが長方形に張り出している。
- ・張り出し部の左右両側とも石垣積みで、城外側からみて右側は残存高2.7m、左側は1.3mが残っている。
- ・張り出し部の下部は石垣積みで、残存高は最高部でも敷石上面から2.1mだが、右側の石垣の高さからみて同高かそれより少し高い3m前後と推定しておきたい。ただ、張り出し部と両側の石垣が同じ高さかどうかは不明である。
- ・張り出し部の石垣は、基底部に花崗岩の平石状の石材を据え、その上部は20～50cmほど控えてから積み上げている。残存する石垣材はアプライトを用いている。
- ・張り出し部の各コーナーと中間部から合計6本の一辺が50cm前後の柱痕がほぼ4m間隔で検出された。ただ、中間部の2本に対応する奥行側（土塁内）には柱はない。
- ・城内壁となる内側列石も検出され、それに接するように柱穴列もほぼ3m間隔で検出された。
- ・内側列石の前面には6～7段の石段がある。
- ・張り出し部の外面から城内側へ6mほどのところから、左右両石垣の奥へ掘り方がみられる。一見、張り出し部と両石垣がのちに構築されたかのような印象をうけるが、調査時の状況から時期差とは考えられず、作業手順の反映か工事期間中の一部設計変更とみられ、張り出し部と両石垣を構築するための掘り方と考えている。
- ・張り出し部と城壁を合わせたこの区間の想定床面は、およそ13×13m前後となり、ほぼ百畳敷きに近い広大なスペースとなる。
- ・角楼に似た城壁の突出区間は、南門と東門との中間のあたりと屏風折れの石垣と称されているところにもみられる。両所とも石垣積みで前者は多角形状に、後者は舌状に城壁が巡るものであるが、角楼のように城壁の一部が突出するのではない。この両所に似たところは背面側にも数箇所ある。

ところで、この遺構の名称「角楼」は第6回鬼城山整備委員会で決定されたものである。日本の古代山城では、対馬金田城に同種の遺構<sup>68)</sup>があり、それは突出部と呼ばれている。また最近では御所ヶ谷城東門の近くの土壇に雉城を比定する意見<sup>69)</sup>もある。

佐藤興治氏は「城壁に伴う施設として角楼・雉・敵台がある。いずれも、城壁外面に多くは長方形に突出した部分で、隅角にあるものを角楼、門に近接してあるものを敵台、そして両者の中間位置にあるものを雉と呼んでいる。角楼は、主として戦闘指揮所<sup>68)</sup>としている。

また、車勇杰氏は「城壁と直交し城壁の外側に方形、あるいは長方形に突出した壁体を雉城という。雉城の外表面が半円形に造られたものを曲城という。雉城ないし曲城の上面に建物を造ったものを敵台、あるいは角楼などと呼ぶ。」「城壁の方向が屈折する位置にあるものは角楼と呼ぶ場合もある。」<sup>69)</sup>としている。

この鬼ノ城の角楼に建物があつたかどうかについては、鬼城山整備委員会の諸先生方にも存否両論

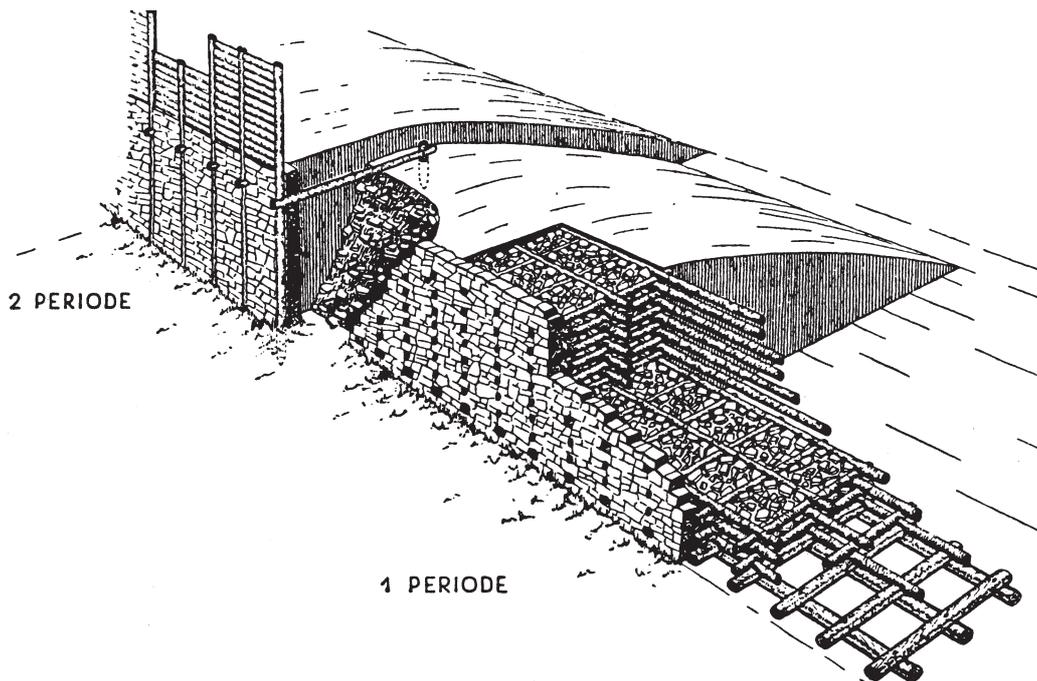
がある。筆者は柱が張り出し部の外面側にのみあり、対応する内側の2本を欠くことから、建物は存在しないと考えている。確かに台輪を組めば建物は可能かもしれないが、むしろこの遺構は上面を床張り（あるいは版築土塁の上面をそのまま床とした可能性もある）し、外周を板壁状にした胸墻のような施設と考えている。

それともう一つこの遺構が注目されるものとして、朝鮮半島の山城でいう「柱溝」とも「垂直溝」ともよばれるものがある。垂直溝は、鬼ノ城の角楼のように城壁の張り出し部の石築面に存在するのではなく、通常の石築壁体面の一部であり、また類例も多くないようである。その性格・用途については山田隆文氏の論考があり、「現在のところ垂直溝は永定柱状のものと捉えるのが妥当のようである。」<sup>(41)</sup>とされており、垂直溝に柱があったとすれば、版築土塁構築における永定柱と同様の性格を想定されているようである。

これに関連していえば、坪井清足氏がヨーロッパの鉄器時代後期に完成するガリア壁を紹介されているが、図をみると第2期のものはまさに垂直溝を髣髴させるものである。ことによると、垂直溝もこうした手法の反映であろうか。

しかし朝鮮半島における垂直溝の類例は少なく、また各城でも一部区間のことであり、石築壁体の構築にあたってさまざまな手法が用いられたのであろう。これに比べると鬼ノ城の角楼例は、少なくとも張り出し部の全体に及ぶものであり、また石積みに先行して柱が立てられ、石積み後も柱が残っていることは、柱が単に石積みに利用されただけでなく、上部に簡略ではあってもなんらかの施設を想定させる。

なお、出宮徳尚氏はこの角楼について、「城壁の側方射角の形成としては、単独であるうえに設置位置が迎撃に有効な位置とはいえず、城壁構築工法上からの石塁（石垣）設置必要箇所と判断される。」<sup>(42)</sup>とされている。確かに指摘されている面はあるが、ここは背面側からの侵攻ルートの一つであり、む



第167図 ガリア壁 マンチンのオピダ 右が第1期でガリア壁、左は第2期 第1期より古い手法で作ってある。註41書より

しろ側方よりも正面を意識したものであり、また西門や最高所の鬼城山との関連で捉えるべきものと思われる。

## (5) 敷石

板状摂理の発達した小アプライト材を用いて、城壁の内外に石畳状に敷石が付設されている。調査前にも、鬼ノ城が古代山城として認識される端緒となった区間の城内側でその存在は確認されていたが、当時は近世の観音信仰に伴う信仰道と思われていた。その後、角楼跡に最初に設定したトレンチで城外側敷石を確認し、鬼ノ城築城期から存在する遺構であることが確認された。

- ・敷石は城壁に接して、城外側にも城内側にも敷設されている。全城壘区間を調査したわけではないが、正面側は水門部や露岩などのある一部区間を除き、ほぼ全区間とっていいほどの範囲に敷設されている可能性がたかい。一方、背面側は城外側についてはかなりの区間に敷設されているようであり、城内側についてもいくつかの区間で散見される。
- ・敷石の幅は基本的には1.5mであるが、敷設場所によっては多少の広狭がある。また、城外側にはそうしたものはみられないものの、城内側では敷石と城内に空白部のあるところでは、幅広く敷設しているところもある。
- ・城門部では城壁下内外だけでなく、城壁上面の一部—土壘中の柱穴列から城内壁にかけての範囲—にも敷設されている可能性がたかい。
- ・敷石の長軸側の傾斜は城壁のそれと同じだが、短軸側の傾斜は城外側では前面に緩く下降傾斜させている。また城内側では城内へ向かって下降傾斜させている。なお、城内外側とも敷石敷設場所が平坦なところでは、こうした原則を保ちつつもほぼ水平に近い状態である。
- ・敷石材は一部に花崗岩もあるものの、殆どはアプライト材である。
- ・敷石の機能としては、通路としての役割も否定できないものの、第一義的には流水によって城壁の基部となっている内外の列石の下部が洗われ、損壊することを防止するための土木工学的な措置であったと思われる。とくに城内側敷石の態様は、城壁天端の傾斜が城外側へ下降していたのか、城内側へ下降していたのかを示唆しているようでもある。機能的な役割はそうしたことが考えられるが、反面敷石帯の存在は、視覚的にも城壁の威圧的效果をよりたかめている。

この敷石遺構は鬼ノ城独特ともいえるもので、日本の古代山城では類例がなく、モデルになったであろう朝鮮半島でも蛇山城、扶蘇山城、王宮里<sup>48</sup>など数例が知られるのみである。また、その残存状況、というより築城当初の敷設範囲に関係するのであろうが、それほど広範囲にみられるものではないらしい。

その機能については先に触れたように、通路としての側面を完全に否定することはできないものの、第一義的には城壁下部や前面が雨水等によって洗われ、破壊するのを防ぐすぐれた土木工学的措置であることは疑いなかろう。このように理解するならば、国内の古代山城においても敷石敷設の有無はともかくも、それに類する措置が施されている可能性が考えられよう。筆者がごく一部の列石区間を見学した永納山城でもそれらしい箇所が何か所か認められた。

また形態や構造は異なるものの、朝鮮半島の山城でいう「基壇補築」<sup>49</sup>も、石を積むことと敷くことの違いはあっても土木思想的には一脈通じるものであろうと思われる。

この城壁の内外にみられる細く長く連なる帯状の敷石帯は圧巻であり、そこに使用された石材の個数は万余にもなろうか。この石材の採取、運搬、敷設に要した労働力だけでも計り知れないものがある。

## (6) 城内の施設

これまでも触れてきたとおり、総社市教育委員会による発掘調査は、土地の所有関係もあって城壁線とそれに付随する施設の調査を主体としたもので、城内についてはごく一部の範囲のみである。

城内部については、平成11年度に岡山県古代吉備文化財センターによって、湿地部を除き遺構の想定されそうなほぼ全域にわたってトレンチ調査が実施されており、報告書も近刊の予定とのことである。ここでは総社市教育委員会の調査と公表されているものについて触れておきたい。

### 礎石建物群

昭和58年に最初の礎石建物が発見されて以来、7棟が確認されている。大半は表面観察にのみ基づくものであったため、のちに規模については一部修正されたものもある。

- ・礎石建物は城内のほぼ中央部に所在しており、東方にのびる尾根上の平坦部から緩斜面を利用してゐる。緩斜面に所在するものは、緩くL字状に削平造成して平場を確保している。
- ・7棟のうち6棟は礎石総柱建物跡らしく、1棟は側柱のみ礎石をもつ建物跡である。
- ・礎石総柱建物のうち規模が判明しているのは3×2間が1棟、3×3間が1棟、3×4間が2棟であり、他の2棟は後世の砂防工事などで損壊していて不明である。
- ・側柱にのみ礎石をもつ建物跡は梁間2間だが、桁行は6間なのか7間なのか確定できていない。柱間10尺で化粧基壇をもつもので、礎石総柱建物とは性格を異にしている。
- ・これらの建物跡は、東方にのびる尾根稜線を境にして分布しており、総柱建物群は北側に(第Ⅰ群)、側柱建物は南側(第Ⅱ群)に位置している。

### 小溜井

籠城の際不可欠の用件はいくつもあるが、わけても食料と飲料水は重要である。飲料水については、現在湿地になっているところの利用が想定されているが、それらの補完的なものも存在したはずである。

- ・城内最高所の鬼城山(標高397m)に近い緩斜面(382m)で、小堤防状をもつ2×3mの小溜井が検出された。出土した須恵器からみて、鬼ノ城存続期のものとみられるものである。おそらく城内の各所にこうした小溜井が存在していると考えられる。

### 狼煙場?

鬼城山の一角で地山が1m大に被熱した痕跡が確認された。穴の底部らしく形状は不明であり出土遺物もないが、西門や角楼も直近にあり、狼煙場の可能性も考えられる。

およそ30haの城内については、平成11年度に岡山県古代吉備文化財センターによって、総面積5,380㎡にわたってトレンチ調査が行われた。当時地元の自然保護団体との自然保護に関する協議もあって、湿地部や谷裾部は除外されたが、それらを除けばおよそ遺構の想定されるほぼ全域にわたって実施されたと言ってよい。それでも城内面積からすれば2%弱に過ぎないが、遺構として礎石建物2棟が発見されたほか、柱穴や土壙、鍛冶遺構などが検出され、土師器や須恵器などの遺物も出土し

た。しかし当初推定した遺構の様相とは程遠く、城壁線の整備度にくらべ城内施設の整備状況は見劣りするような印象を受けた。とは言え、城壁線は完成していたとみられる状況だから、それらに伴う遺構—例えば作業小屋や宿舎、作業道や用資材の搬入道、作業に関わる工房、工事に伴うごみ穴、事務的施設などは当然のことながら存在していたであろうし、それらが未検出であることを考慮すれば、軽々に結論を急ぐことはできないのではあるが—いずれにしても、現時点では外回りに比べ城内の整備はやや劣っているのではないかとの印象は拭いがたく、あるいはそうしたことにこそ、鬼ノ城のもつ歴史的な背景と性格が内包されている可能性もまた否定できないのではあるまいか。

## (7) 城外の遺構

正面側眼下の谷間の水田の出口あたりに、小堤防状のたかまりに人家が横一列に並んでいる。「水城」状遺構と称され、はやくから注目されていたところである。ここにも平成11年度にトレンチ調査が行われた。

- ・堤防状の高まりは後世に削平され、現状では周囲の水田より1.5mほどの高まりしかない。長さは300m余で、東端には血吸川が南流している。たかまりの前面の小字は「御門」である。
- ・高まりの幅は21mで、版築状に堅くよく締まった層で積み上げている。
- ・たかまりの最下部は、樹枝や葉を敷いた敷葉工法を採用している。
- ・出土した遺物から、この高まりは中世以前に築堤されていたことが判明した。

この水城状遺構—規模からいえば小水城状であるが—について、鬼城山整備委員会委員であり鬼ノ城の発見者でもある高橋 護氏は、ノートルダム清心女子大学の最終講義で衝撃的な独自説を展開されている。

高橋氏は吉備地方最大の造山古墳と河内地方の古墳の類似や中国の文字資料を根拠に、造山古墳の被葬者は倭の五王の一人である讃の前の、記録に残っていない倭王と考えられるとし、水城状遺構については、土塁の下に埋まった照葉樹の葉の放射性炭素（C14）の年代測定で、67%の確立で350年から440年の間に収まるとの結果から、この王が朝鮮半島に出兵して高句麗と激突し、自分の住むところに高句麗と似た城を築いた可能性<sup>96</sup>がある、としている。報道紙面ではこのように紹介されているが、高橋氏は水城状遺構とそれに連なる羅城を考えられているようである。

この水城状遺構の東の丘陵群は、ゴルフ場造成に伴って総社市教育委員会が発掘調査を実施し、報告書も刊行されている。確かに丘陵群には低い土塁が部分的に残っており、砦状の小区画も数箇所認められた。ゴルフ場の造成工事であったから、広範囲にわたって尾根を全面的に調査したが、羅城的になるような土塁はなく、また流失していたにせよそうしたことを想定させる地形の改変もみられず、部分的に残っている土塁は規模も小さく築成も水城状遺構の築成とは異なるものであった。

報告書では、これらの遺構を天正10年（1582）の羽柴秀吉軍の備中高松城水攻め時の羽柴方の「陣城<sup>97</sup>」としている。

他に城外施設としては鬼ノ城にいたる道が想定される。これについて中村太一氏の論考<sup>98</sup>があり、古山陽道から分岐し鬼ノ城にいたる支路が想定されている。ただこの支路案は鬼ノ城南麓の砂川あたりまでで、そこから先の丘陵部については示されていない。筆者にはこれを論じるだけの知見はないが、予測されるルートがないでもない。というのも、いま鬼ノ城の駐車場の近くにある新山とその背後の岩屋地区は、平安時代には山上仏教の一大聖地であり、京の高僧たちも修行に励んだ地である。この

新山地区の南面の小さな谷水田のあたりは「大門」とよばれる地であり、いまも3間1戸の門礎石が整然と残っている。おそらく鬼ノ城期の古道が平安時代の山上仏教期に踏襲、整備、利用されたのではあるまいか。とするならば、麓下の砂川からの現道はそのままでないとしても、かなりの部分を踏襲している可能性もあると考えられる。

こうした予測もあり、また鬼ノ城で使用された木材の大部分が搬入されたいことから、平成12年度に搬入道の検出を試み、角楼・西門の周辺を中心にトレンチ調査<sup>68</sup>を行ったが、成果を上げることはできなかった。このルートは西門と北門を想定したものである。

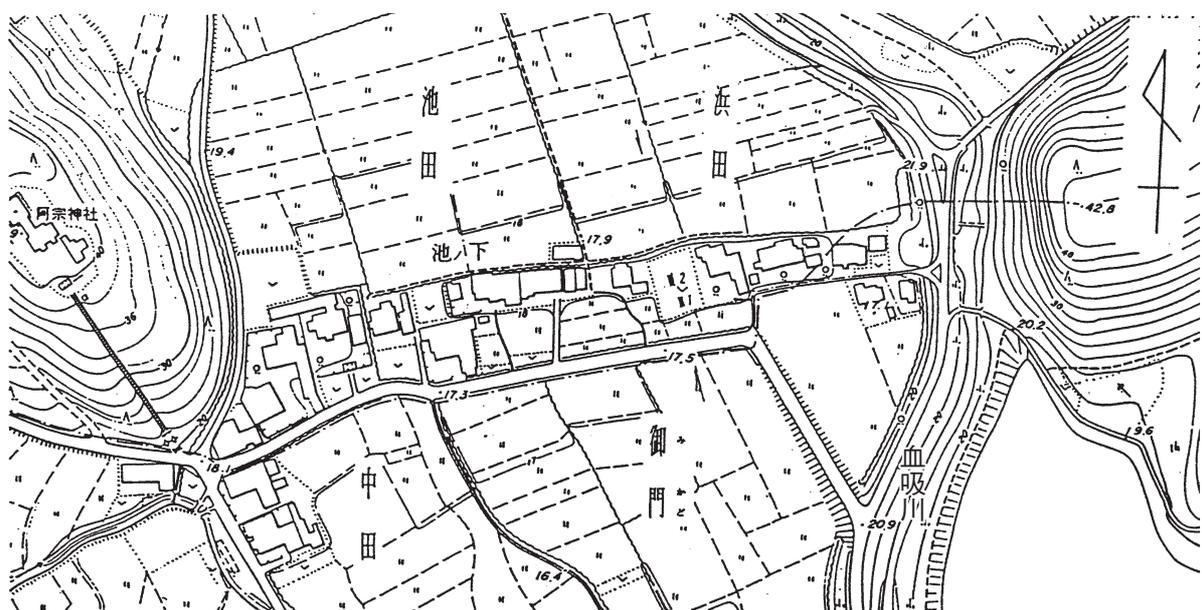
これに対し南門と東門、あるいは西門もかもしれないが、このルートは先の中村氏案から再分岐するのか、あるいは別ルートになるのかは分からないが、先の小水城状遺構のある谷部からのルートであることは間違いなかろう。地元古老によれば、数十年前までは新山谷道、<sup>にいやまだに</sup>観音谷道<sup>かんのんだに</sup>として山道の利用があったと聞いている。そうした観点からすれば、ここを遮断することはそれがたとえ羅城を形成していなくとも第一次防衛線として大きな意味をもつ。ここでも血吸川が貫流しているが、その上流部となる旧第2城門推定地近くの谷部出口と新山地区背後にも土塁があることを高橋氏は指摘<sup>58</sup>してい



第158図版 大門跡を望む



第159図版 大門跡



第168図 水城状遺構周辺図

る。(第164図参照)

以上、鬼ノ城の構成要因である各遺構について概観してきた。吉備高原南縁の自然要害に選地し、一部に高石垣を築いた高さ6m前後もの版築土塁を主体とする城壁を2.8kmにもわたって鉢巻き状に巡らせ、谷部には強固な水門を構築している。城門は3門が懸門型式を採って防備性を高めるとともに、床面を石敷とした強固堅牢で壮大な城門とするばかりでなく、横矢による側防や城門突破時の対応策もみられる。こうした高い防御策にとどまらず、麓下には小水城状の土塁をも構築して第一次防衛線とするなど、要害堅固な城づくりに腐心している。またこうした防御面のみでなく、城壁の耐久性を意図しているのであろうか、城壁内外には敷石の敷設をはじめ、水に対する細心の措置も施されている。

鬼ノ城は日本の古代山城の中で、規模的には突出した存在ではないが、まさに堅城の名にふさわしい城といえよう。

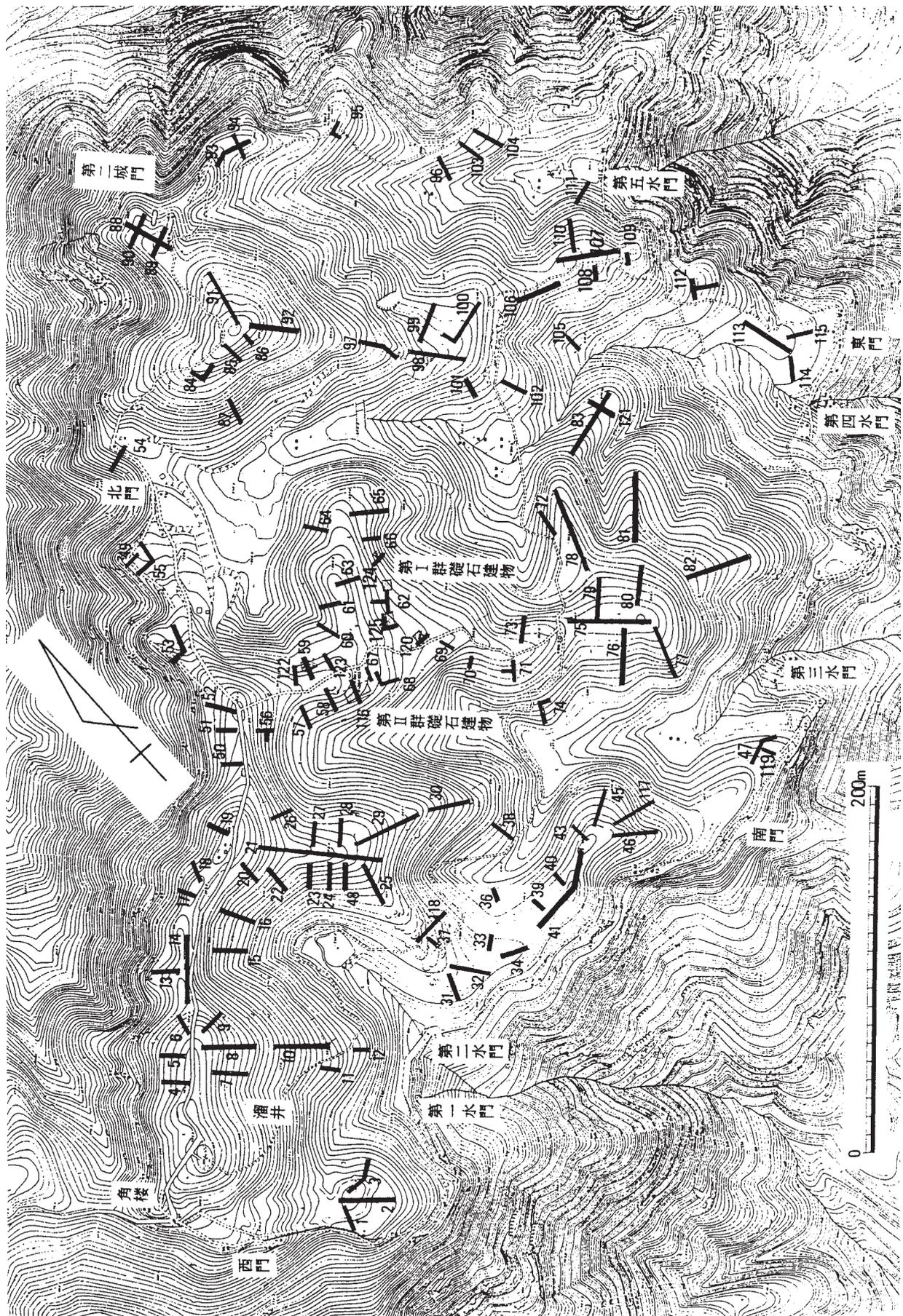
すでに先学により再三指摘されてきたことであるが、構成要因を相対的に判断すれば、北部九州の神籠石系山城とはあきらかに異なる要因であり、瀬戸内型<sup>53)</sup>に分類される神籠石系山城のうち、コの字状の門礎をもつ3山城<sup>54)</sup>とは共通性をみるものの、むしろ大野城や金田城などの天智朝の朝鮮式山城に近い要因を多く見いだし得るようである。<sup>55)</sup>

こうした鬼ノ城の諸特徴が、モデルになったであろう朝鮮半島三国の、どのような影響を反映しているかについて車勇杰氏は難しいところだがとされつつも、項目別にみると版築は百済の影響とみてよいのではないか。排水溝は新羅的だし、雉は新羅にもあるが三国末になると共通の要素になっていく。全体的にみれば、いろんな要素が交じりあっていると考えてよく、その中で城壁の走り方、プランをみれば新羅的な要素が少し強いのではないか。三国のいろいろな要素が交じりあっているし、石が大きくなるのは日本的要素であろうとされ、結論的には三国のいろいろな要素が交じりあってきた城と考えるといいのではないかと<sup>56)</sup>とされている。

これまで鬼ノ城出土の遺物については、昭和53年の学術調査団による調査や表採遺物については、昭和55年刊行の報告書では7世紀中葉～8世紀後半の年代観<sup>57)</sup>が示されてきた。その後平成6年度から始まった総社市教育委員会による、主として外郭線の調査では7世紀後半～8世紀代の遺物を含むものの、量的には7世紀末葉から8世紀初頭ごろのものが多いと報告してきた。平成11年度には待望の城内の確認調査が岡山県古代吉備文化財センターによって実施され、本報告書は未刊だが7世紀後半から8世紀代の年代観<sup>58)</sup>が示されている。

ただこれらの年代観はそれぞれの時点でのものであり、その後の須恵器研究の進展によって見直しが叫ばれている。この点について古代土器の研究に精力的に取り組んでいる総社市教育委員会の武田恭彰氏は、畿内産土師器と在地産土師器の比較検討を中心しつつ、共伴する須恵器についても鋭意取り組んだ論考<sup>59)</sup>を発表している。氏の教示によれば、鬼ノ城の出土遺物については近年の須恵器研究の動向からすれば、飛鳥Ⅳ期から飛鳥Ⅴ期に比定されるという。氏の論点は都城を中心とした畿内の出土遺物を基準に援用したものであり、畿内と地方の問題も考慮しなければならないが、かなり限定した期間ということになる。

これまでの調査からすれば、湿地や谷裾部など一部の地域については未調査のところもあるが、外郭線もかなりの地点で調査を行っており、また城内部でもトレンチの数や配置、調査面積などからすれば、目ぼしいところのはほぼカバーした調査ができていると思われ、考古学的にみれば出土した遺



第169図 鬼城山確認調査トレンチ配置図 \*35・42・44は欠番 註56書より

物はおおまかには築城から廃城までの期間を示していると考えられる状況といえよう。ただ遺構構築に先立つ地鎮祭などに伴うものではなく、また若干後出的な遺物も少量ではあるが存在するから、多少前後の時期幅はひろがる可能性は考慮しておく必要があるし、また軽々に判断すべきことではないことは言うまでもない。

筆者はこれまでは遺物の編年観や立地、遺構のもつ特性からみて、鬼ノ城の築城期を官撰史書に記載のある一般的に朝鮮式山城とよばれる一群のものとはほぼ同時期か僅かに遅れる時期を想定していたが、今後新たな視点で鬼ノ城を捉え直してみたいと考えている。

- 註1. 「鬼ノ城 角楼および西門の調査」 『総社市埋蔵文化財調査年報』7 1997  
「鬼ノ城 南門跡ほかの調査」 『総社市埋蔵文化財調査年報』8 1998  
「鬼ノ城 西門跡および鬼城山周辺の調査」 『総社市埋蔵文化財調査年報』9 1999  
「鬼ノ城 登城道および新水門の調査」 『総社市埋蔵文化財調査年報』11 2001
2. 車勇杰「韓国の版築土塁」『城郭における版築技法の比較検討』第21回古代山城研究会発表資料 古代山城研究会 1999
3. 版築土塁の復元工事を担当したアイサワ工業(株)鬼ノ城工事事務所の築沢所長、小野主任の教示による。なお「营造方式」によれば0.6mとのことであるが(註12から)、土質の相違、人数、習熟度の問題等もあり、また新規築成と補修的築成の違いも考慮する必要がある。因に平成8年度に我々で実施した「実験的版築」では0.15m程度であったが、これには併行して一部の調査や土砂の選別等も含まれており、それを勘案すれば今回の復元時の数値に近いものになると思われる。
- 4-1. 鏡山 猛「おつぼ山神籠石」  
2. 鏡山 猛・小田富士雄「帯隈山神籠石」  
3. 石松好雄「女山神籠石」  
4. 伊崎俊秋「女山神籠石の継続調査」  
5. 小野忠熙「石城山神籠石」  
小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書10 名著出版 昭和58年所収  
6. 小川秀樹「史跡御所ヶ谷神籠石」『行橋市文化財調査報告』第26集 行橋市教育委員会 1998  
7. 須原 緑「鹿毛馬神籠石」『颯田町文化財調査報告書』第4集 颯田町教育委員会 平成10年
5. 註4-2と同じ
6. 横田義章・横田賢次郎・高橋 章『特別史跡大野城』Ⅶ 福岡県教育委員会 1991  
柱列は2.5~2.8mほどの間隔をあけて2列あり、柱間は1.0~2.0mと不揃いである。  
御所ヶ谷城(註4-6)、鹿毛馬城(註4-7)でも同種例が報告されている。
7. 註2と同じ
8. 西川 宏「朝鮮式山城の源流についての初歩的探求」『古文化談叢』第30集(中)1993
9. 註4-1、2、3、4と同じ(おつぼ山城で294~296cm、帯隈山城で3~3.1m、女山城でほぼ3mと平均292cmの数値が示されている)。
10. 註4-5と同じ(219cmの数値が示されている)。
11. 註2と同じ
12. 成正鏞「百済土城の変遷と山城」『日韓歴史フォーラム 鬼の城の成立をめぐって-古代吉備と朝鮮半島』資料集 2003
13. 註4-1と同じ
14. 註4-6では「この柱を土塁上に突出させれば姫垣の支柱として利用することもできる。」としている。  
向井一雄「古代山城研究の動向と課題」『溝瀆』第9・10号合併号 古代山城研究会 2001
15. 車勇杰・趙順欽・尹大植「清原壤城山城」『中原文化研究叢書』第23冊 2001
16. 河本 清「第四章 諸施設の概要」『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 昭和55年
17. 車勇杰「韓国古代の山城 -鬼ノ城と関連して-」『日韓古代山城シンポジウム参考資料集』平成14年  
三年山城の東水口、忠州南山城の東水口、丹陽温達山城の北水口、河南二聖山城の南水口、驪州娑娑山城の西水口などを紹介されている。

18. パリノ・サーヴェイ(株)の分析では、南門柱11から出土した炭化材はケヤキと報告されており、柱材の一部が炭化、残存した可能性があるとしている。
19. 向井一雄「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』第27号 1999
20. 岡田英男編「門」『日本の美術』第212号 至文堂 1984
21. 石松好雄・桑原滋郎「大宰府と多賀城」『古代日本を発掘する』4 1985  
「掘立柱用の門礎」という意味でこの語を用いた。
22. 註6と同じ
23. 註19と同じ
24. 山口裕平「西日本における古代山城の城門について」『古文化談叢』第50集(上) 2003
25. 葛原克人「備中鬼ノ城の創築期をめぐって」『田辺昭三先生古稀記念論文集』2002
26. 古門雅高・本田秀樹・田中淳也「金田城跡」『美津島町文化財調査報告書』第9集 2000  
古門雅高・田中淳也「金田城跡Ⅱ」『美津島町文化財調査報告書』第10集 2003
27. 田中淳也氏のご教示による。
28. 2002年3月21日付山陽新聞で小田富士雄氏は、階段状の床面は類例がなく「屋島型」と呼んでいい、とコメントされている。
29. 註19と同じ
30. 註17と同じ
31. 山元敏裕「史跡天然記念物屋島」『高松市埋蔵文化財調査報告』第62集 2003
32. 山陽新聞社 われらアジア 岡山・コリア新世紀 の取材時に車勇杰氏からご教示いただいた。
33. 註30書で山元敏裕氏は「現在確認している排水口からは約3m程度高くなると想定」されている。
34. 註17、32と同じ
35. 「大宰府復元」大宰府史跡発掘調査30周年記念特別展図録 九州歴史資料館 1998
36. 向井一雄「対馬金田城一の木戸について」・工藤茂博「対馬金田城についての覚書」溝漕第4号 古代山城研究会 1993
37. 註14と同じ
38. 佐藤興治「朝鮮古代の山城」『日本城郭大系』別巻1 新人物往来社 昭和56年
39. 註17と同じ
40. 山田隆文「丹陽独楽山城踏査記－石築城壁面の垂直遺構について－」『溝漕』第7号 1998  
「柱溝のある石築城壁」古代山城研究会第27回資料 2002
41. 坪井清足「ヨーロッパ先史城塞と較べて」『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 昭和55年
42. 出宮徳尚「古代山城跡の検証覚書」『環瀬戸内海の考古学－平井 勝氏追悼論文集』下巻 古代吉備研究会 2002
43. 註32と同じ 車勇杰氏のご教示による。
44. 註32と同じ
45. 葛原克人「第三節 古代山城跡」『岡山県の考古学』昭和62年 吉川弘文館  
氏の試算では計八カ所の溜め池で合計4000トン余としている。
46. 2004年2月11日付けの山陽新聞の報道による。
47. 武田恭彰「奥坂遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』15 1999
48. 中村太一「山城・駅路・令制国－備前・備中を中心に－」『溝漕』第11号 古代山城研究会 2003
49. 「鬼ノ城 登城道および新水門の調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』11 総社市教育委員会 2001
50. 高橋 護「鬼城山・築地山」『特集“神籠石”研究の現状』考古学ジャーナル117 1975
51. 坪井清足「神籠石」『古代史発掘』6 講談社 1975
52. 註19書で向井一雄氏は、讃岐城山城、石城山城、播磨城山城、鬼城山城のコの字型門礎を論じておられ、鬼城山城以外は城門部が未完成だったことを示唆している、とされている。
53. 文献に記載のない神籠石系山城としての鬼ノ城は、少なくとも城壁線とそれに伴う諸施設は完成しており、かつまた城壁は石垣を含む高いもので、城内には礎石建物が備わっている。こうした点は他の神籠石系山城には見られないものである。
54. 註32と同じ
55. 『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 昭和55年
56. 『所報 吉備』第28号 岡山県古代吉備文化財センター 2000

57. 武田恭彰「三須河原遺跡・三須畠田遺跡・三須美濃田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』16 総社市教育委員会 2003

58. 鬼ノ城の創築期については、これまで多くの先学により論じられてきた。調査の進展状況や出土遺物量の少なさもあって、当時の歴史的背景や遺構分類等を中心に進めざるを得なかったことはいうまでもない。こうした中で具体的な創築期を示されたのは山尾幸久氏である。氏は「670年を中心に669年冬から671年春までの一年半、倭国は文字どおり国家存亡の崖っぷちに立っていた。」(『古代王権の原像』東アジア史上の古墳時代 学生社 2003)とされ、鬼ノ城の築城を「669年から671年までの2年間」(われらアジア 第一部 天空の城⑦ 白村江 山陽新聞社 岡山・コリア新世紀シリーズ 2004. 4. 21)とコメントされている。阿部義平氏は「斉明朝に至って神籠石が恐らく一斉に選定されて造営が開始されたのではなからうか。」とされ、「神籠石山城自体のあり方は、その段階の国内体制とその領域防衛ということに対応するあり方なのであろうと思われ、敗戦という国家権力の危機に面して中断されるような要因が含まれていたものと考えられる。」とし、鬼ノ城は神籠石的要素の上に完成した姿、とされている(藤木久志・宇田川武久編『人類にとって戦いとは』4 攻撃と防衛の軌跡 東洋書林 2002)。向井一雄氏は、各山城の調査状況や出土遺物、学史的検討を踏まえて、古代山城遺跡の検討課題として選地・縄張り、外郭構造、城門、内部施設等多岐にわたって検討され、各山城を類型化されたのち編年観の見通しとして、北部九州に①-I類(大野城、基肄城、金田城-城名は筆者が挿入)と②-II類(鞠智城)、瀬戸内沿岸から畿内に②-I類(大廻小廻山城、讃岐城山城、屋嶋城、播磨城山城、高安城)が築造され、その後、①-II類(御所ヶ谷城、鬼城山城)や②-III~V類(石城山城、永納山城、宮地岳城)が修築・新造の過程で出現、③類(高良山城、女山城、帯隈山城、鹿毛馬城、おつぼ山城、雷山城、杷木城、唐原城)についても数度の造営工事を経て現在みる配置に至ったと考えられる。とし、鬼城山城は②-I類だったものが修築を受けた最終的な姿、だったとされている。さらに氏は交通路や烽、官衙、文献資料にも言及したのち、対外国侵略軍用-大野城や鬼城山城(①および②類)、対国内地域勢力用-北九州の神籠石系山城(③類)と位置づけられる。とし、①②類の築城について対外防衛が第一義だったとしても、律令体制へのシフトを容易にした側面をみ、③類についても真の目的が北部北九州の令制化だったとしても、公式には対外的な防衛拠点として建設が進められていったと思われる。(向井一雄「古代山城研究の動向と課題」『溝漣』第9・10合併号2001)と結んでいる。

山尾氏の説かれるように百濟滅亡と白村江の敗戦を契機とし、倭における律令国家への体制改造と国家的戦闘力の補強、全国的な臨戦体制の樹立とその後の戦争準備の恒常化・固定化を経て特異な軍事国家が702年に完成し、720年代に日本型律令体制の盛期(山尾幸久「前掲書」)を迎えるのであれば、701年の高安城、719年の茨城・常城の廃城も、また向井氏のいう③類の神籠石系山城のいくつかに未完成に終わった山城が存在することも理解できるように考えられる。